

五山版の装訂

一 鎌倉時代の版本とその装訂

古代中世の日本には六朝から隋唐時代の影響を受けた写本文化が色濃く遺り、宋版を受け入れ始めた平安末から鎌倉時代にも、漢籍と言えは写本で行われることが普通であった。その装訂は、現存の旧鈔本を見る限り、経史の典籍から唐人の別集まで、卷子本に仕立てることが常例であったが、平安末には、経籍の疏釈に冊子本の用いられた例が見られる^①(図1)。そして、正統的な漢籍の世界では副次的な内容に制限された冊子本が、儒学からは距離を置く仏教寺院の学問や、宮廷に於ける仮名文学の書に用いられ、普及の幅を広げていたことは注意される。

冊子写本の様式は、敦煌出土の文献と、ある程度、その揆を一にするものであり、中国で縫綴装、胡蝶装と呼ばれる形に、比較的近い。しかしその機能について見ると、携帯用、また随時参酌の便宜に従う側面その他に、特に仮名文学の分野では、審美的な観点からも冊子本の採用されたことが、平安時代の遺品から伺える(図2)。

日本では、宋版に対する「胡蝶装」の称を避けて「粘葉装」と呼ばれる糊付けの冊子は、主に写本の器であったことが、まず指摘される。特に平安末から鎌倉時代にかけて、寺院社会で大いに流行したことが、やはり当時の遺品から伺える。この時代、奈良や京都の寺院では、様々な宗派が隆盛を競い、それぞれの重視する經典と、教学を確立した祖師の著

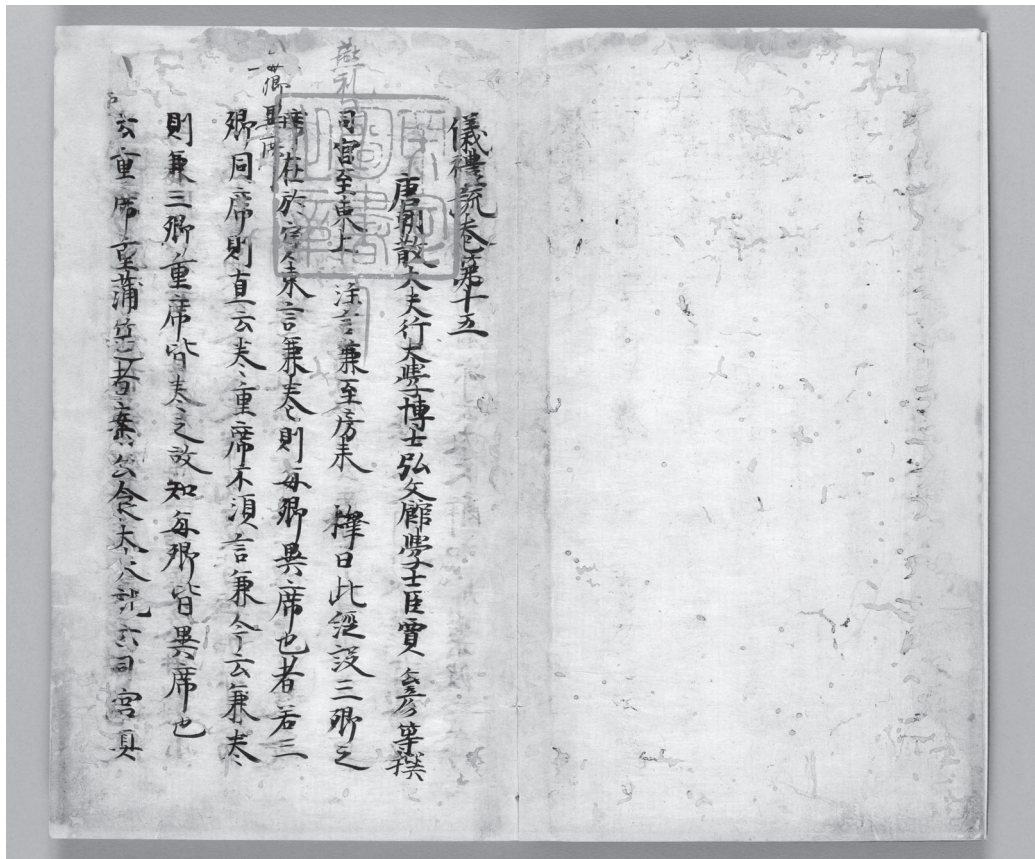
作が、日常的に親しく学ばれた。それを支えた書籍の形が、粘葉装の冊子であり、押し界や朱墨の点校を加えた、両面書写の鈔本が行われている。

一方、この頃の奈良や京都の仏寺は、版本導入の舞台ともなった。これには十二世紀の日宋貿易の発達と、それに便乗する入宋帰国僧のもたらした宋版、殊に大藏経の将来が大きな影響を与えている^③。例えば、平安時代後期に奈良の興福寺で作られた版本の經典、法相宗の教学書は、概ね宋版『開宝藏』の如き、卷子の印刷本である^④。

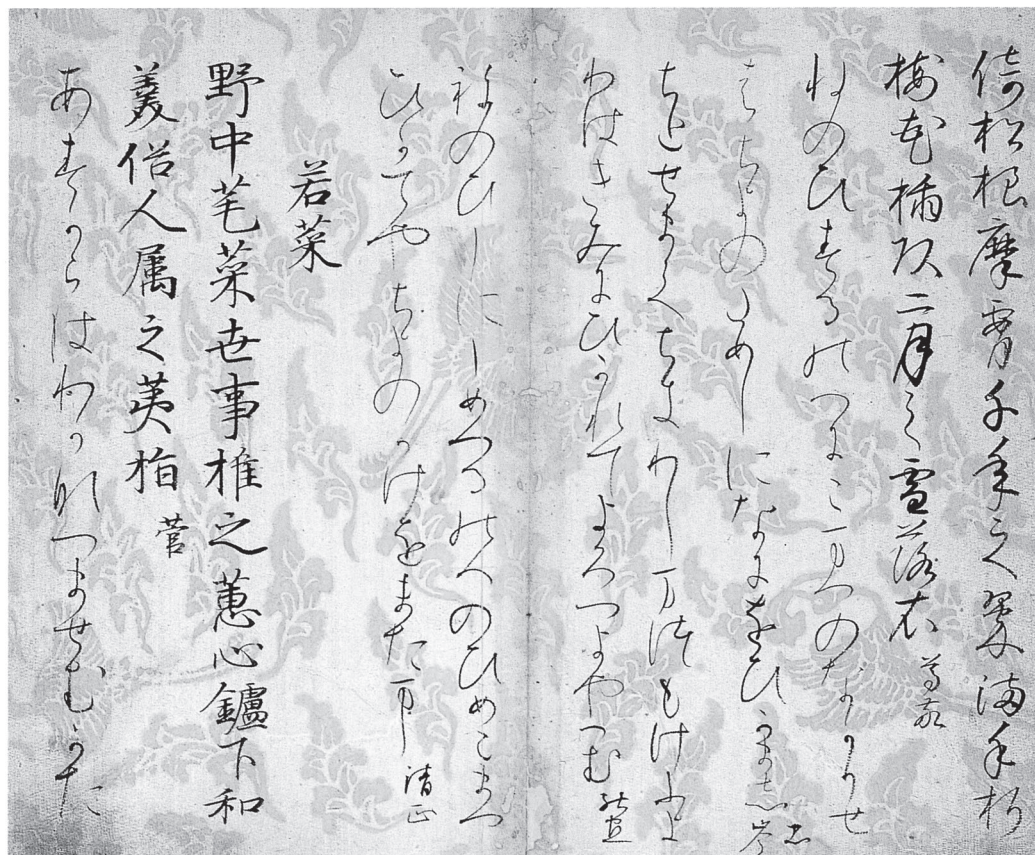
日本では当時一般に、版本の經典を「摺経(すりぎょう)」と呼んでいたが、その装訂が、始め卷子本、後に折帖となったことは、宋版大藏経の変化と同様である。但し日本の場合、摺経の用途が、法会等、仏院の儀式への奉納であり、多数の經典を造って喜捨する写本時代からの伝統に則り、写経の代替としてその数を競った背景から、版式と字様に筆写本の様式を色濃く遺し、写本の複製という本義を体现するための、外形的特色を生じていた^⑤。

この情況下に、鎌倉時代の教学隆盛、粘葉装の冊子流行の局面を迎え、写本仕様の版本と粘葉装の教学書とが融合し、日本独特の版本を産み出した。これらは奈良時代以来の華嚴宗の本山である東大寺、平安時代初期に唐代の密教を移植した高野山金剛峰寺や比叡山延暦寺、平安後期に京都に興った新興の宗派である浄土教の出版等に、悉く採用された^⑥。

住 吉 朋 彦



1. 旧鈔本『儀礼疏』（宮内庁書陵部蔵）



2. 粘葉本『和漢朗詠集』（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）

鎌倉時代の粘葉装冊子版本の、形態の特色を述べておくと、写本さながらの字様で匡郭界線を罫き、両面刷りという点が、まず挙げられる。さらに詳しく見れば、粘葉装では一紙を半折して、各半葉の表裏を使用することから、一紙で半張四面分に対応する。しかしそれは、内容上、紙葉の裏から表へ、また表から裏へと続いていくため、料紙と本文の対応関係で見ると、第一半張と第二半張が裏表、また第三半張と第四半張が表裏の関係となる。これを一紙の表裏として考えると、裏面に第一半張と第四半張、表面に第二半張と第三半張が配置されるから、それぞれを一組みとして初めて、一張分ずつの印刷が可能となる。そして実際、僅かに現存する当時の版本を観察すると、本文の順序を入れ換え、「四・一・二・三」「八・五・六・七」と続く様に配置し、雕刻されたのである。

また印刷を支える版本の特色は、卷子に用いられた幅七十五乃至一百糎程度の長版がそのまま保存され、版木一片の両面に、それぞれ二張分、しかしそれは、半張単位で見ると、右から「三・二・一・四」、また「七・六・五・八」と排列され、粘葉装両面刷りに対応している。長版の保存された理由は俄に定め難いが、寺院に於いて冊子本の印刷が始まったために、摺経の長版と同じ様に、版材を調達、使用、保存する必要があったことに依るのではないかと仮に考えておく。

ここに、日中の版本の様式が分かれた、大きな分岐点がある。中国では当初から、一紙に対して版の一面に対応させる原則が貫かれ、卷子や経摺装から変化して、胡蝶装の片面印刷が始まった時、版木の一面と一紙が対応するよう、短版の様式を採って版木の方が変化したと考えられる。これに対し日本では、長版の様式が保存され、その上で冊子本を印刷すべく、工夫が為された。その背景には、写本の複製という通念の下、長版を保有して来た寺院で冊子の印刷が始まったという、文化社会史的情况の相違があったと考えられる。

ともかくも、鎌倉時代の日本では、写本の複製としての版本という通念が、仏教寺院の中に維持され、中国とは異なる書籍の様式を生じたのであった。この状況を一新したのが、第三章に述べる五山版の刊行である。

二 日藏宋版の改装

平安末から鎌倉時代は、宋版の受容が始まった年代に当たる。版本将来の実行者は、入宋留学僧と、彼らを船舶で移送した海商達であり、特に後者は、仏教經典ではなく、世俗の宋版を宮廷周辺の貴人に贈呈し、その関心を惹いた。日本の古記録に掲載される海商の名は中国風で、明州を外洋航行の出発地とする者の他、日本側の出発地となる博多に居住した華僑や、その取引相手と想定される^⑦。

当時、貴重な宋版を有ち得た日本人は、宮廷周辺の権力者と、その信任を得た儒者達である。平安時代中期、藤原道長が『文選』や『文集』の宋版を保持し^⑧、平安末には、その子孫である藤原頼長が、経史の版本を蒐集した。同時期に活動した明経博士の清原頼業や、頼長の権力を奪取した藤原通憲も、宋版に接した痕跡がある^⑨。貴族から武威をもつて政権を譲らせた平清盛も、孫に当たる後の安徳天皇に宋版の『太平御覧』を贈った^⑩。しかし、これらの版本は現在に遺存しない。

鎌倉時代に入って、収税や治安維持の権力が東国の武士に移ると、次第に鎌倉の武家にも学問が求められ、日宋貿易の一端として、宋版の蒐集が行われた。その代表的な遺例が、金沢北条氏によって蒐集された金沢文庫本である。金沢文庫本の徴証は、早くに鈐記された「金澤文庫」印の存在を主とするが、僅かにそれがない例も、あるようである^⑪。

また入宋留学僧の中に、禅宗に帰依する者が現れ、その後継者達が陸

続と中国に赴き、江南の名刹に入って高僧の印可を求めた際、当地の文雅や書籍文化も、宗教と同時に学ばれた。禅僧の関心は教学以外の多方面に及ぶため、その将来する書籍の中には、世俗の宋版も多く含まれた。禅僧の将来した宋版の代表的な遺例は、京都東福寺の開山である円爾将来の、普門院蔵書であるが、それには仏典禅籍の他に、四部の漢籍が含まれる。この普門院蔵書の徴証は、やはり中世の鈴記と思われる「普門院」印である^⑫。

将来の時期から考え、金沢文庫や普門院の宋版は、みな宋刊宋印本である。しかし残念なことに、もとの装訂が維持されている例は、殆ど見られないようである。ただ、みな元胡蝶装であつたらしいことは、「金澤文庫」「普門院」印が、前後の半葉に鏡映しに附着する事例等によつて容易に推測される。僅かに宮内庁書陵部に蔵する金沢文庫旧蔵の宋版『太平寰宇記』残本は、現在も胡蝶装の姿を留めているが、鈴印が現在の分冊に合わない点から見て、改装を経ているようである(図3)。その他の日藏宋版旧本は、現在は殆ど袋綴綫装に改められている。

「普門院」印の鈴記は仁治二年(一二四二)、円爾帰国以降、恐らくは円爾示寂後のことであり、『普門院経論章疏語録儒書等目録』を編集し、普門院蔵書を整理した大道一以(一二九二—一三七〇)の頃と推測されるが、中世に鈴記された古印と見られる以外、下限については決め手がない。ただ上原究一氏の研究に拠れば、宮内庁書陵部に蔵する宋宝慶三年(一二二七)序刊本『魏氏家藏方』の一部の冊では、現在の綫装と同じく山折りの料紙に「普門院」印記の鈴された痕跡が認められる(図4)。この事例は、おおよそ十六世紀以前の、比較的早い時期に、日本でも胡蝶装の宋版の改装が始まっていたことを示している。

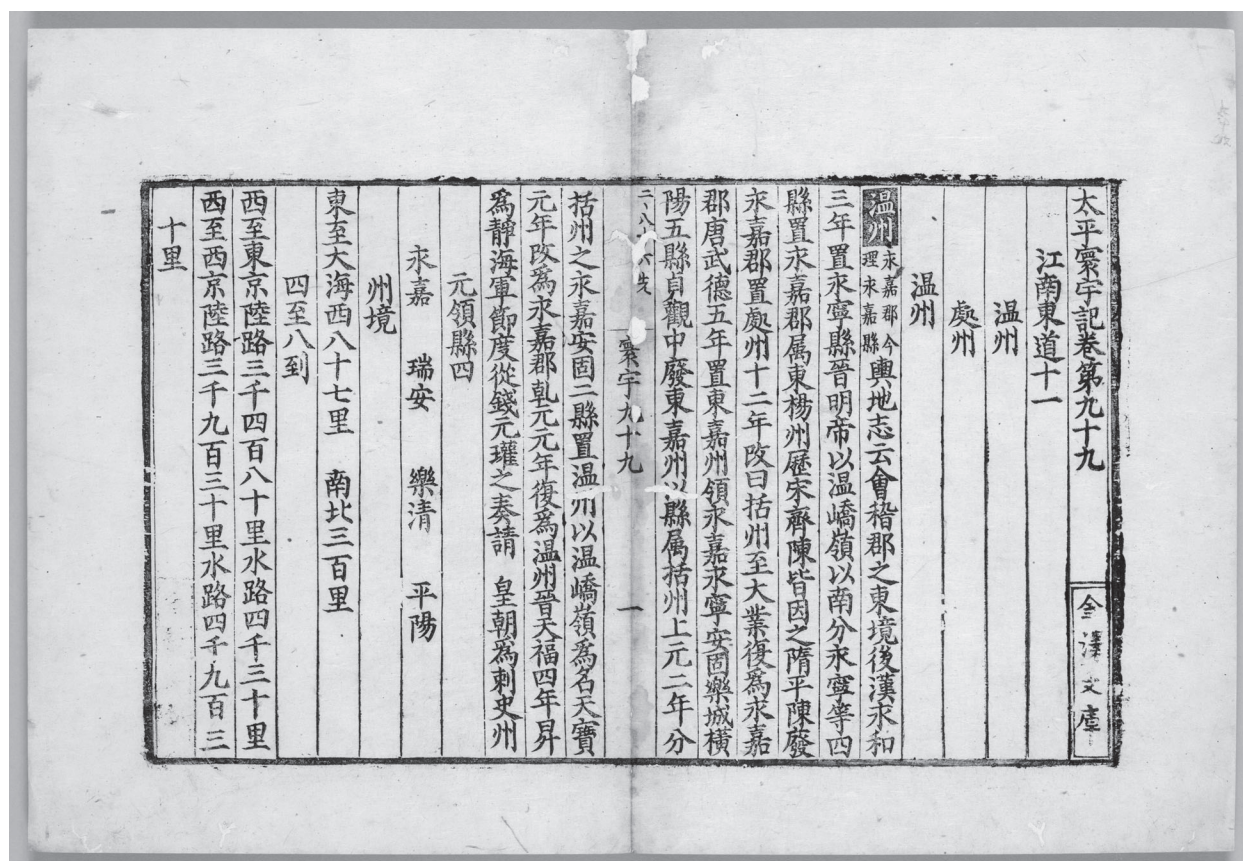
「金澤文庫」印には少なくとも十数種あるが、後世の偽造と考えられるものもある。これらは大きく三類に分けられ、金沢文庫または、後に蔵

書を管理した称名寺での使用と見做される。このうち宋版に使用されたものは、第二、第三類の印記である。第二類の鈴記は少なくとも弘安元年(一二七八)以後(旧鈔本『春秋経伝集解』卷十四至十五、同じく第三類は徳治二年(一二三〇)以後(旧鈔本『群書治要』卷十四)と考えられる。なお第三類の諸印は同一書籍内に雑鈴されるため、並行する同時期の使用と想定される。

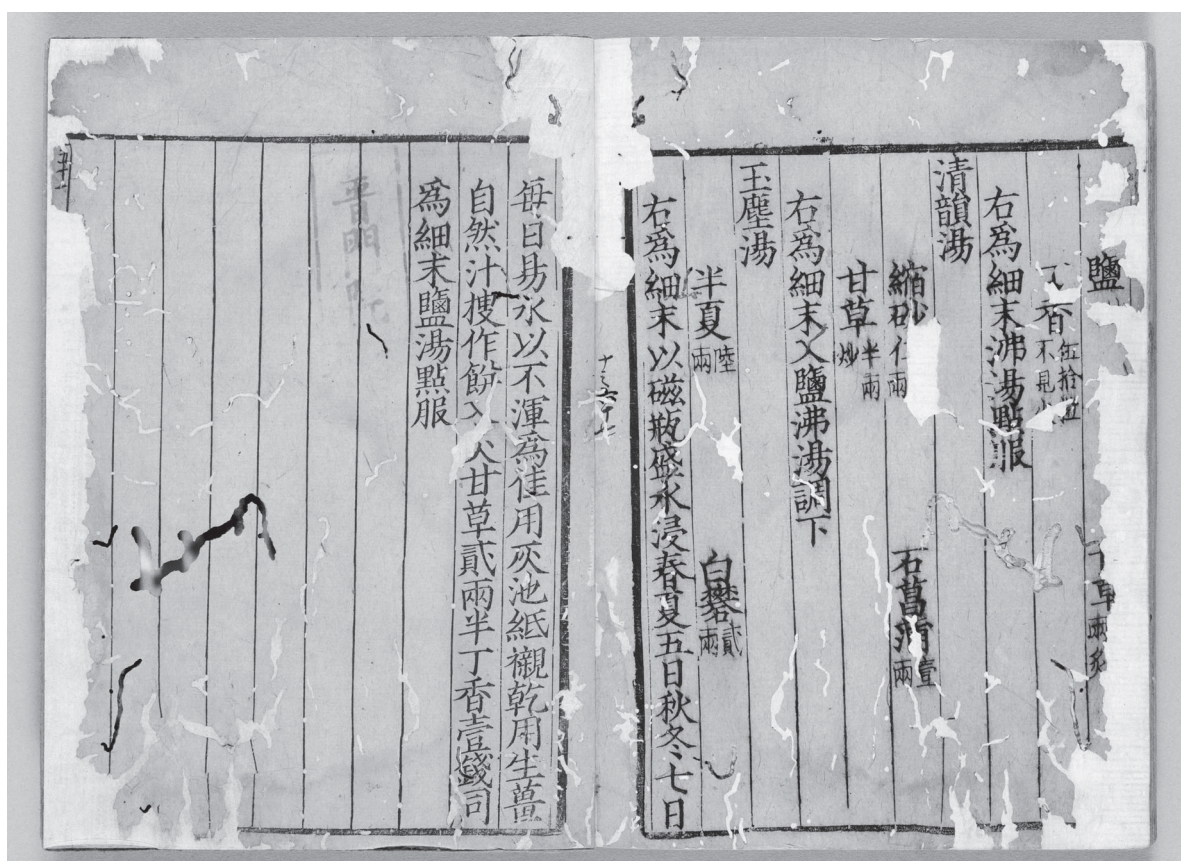
第二類の印記は、鈴された鈔本の書写年代が比較的早く、早期の使用と考えられる。金沢文庫の名称は、元弘三年(一二三三)に滅亡した金沢北条氏の所有を意味するから、一部の印は元弘以前の製造と、一応は見做されるが、鈴印の時期はそれ以降という可能性もある。

例えば、室町前期、関東管領として実権を掌握した上杉憲実、憲忠父子が足利学校に寄進した(宋紹熙嘉定間(一一九〇—一二二四)刊本『附釈音毛詩註疏』他の、宋版五経注疏合刻本には、金沢文庫本であろうと目されるものの「金澤文庫」印がない。一方、憲実の手によつて大内氏の領内にもたらされたと想定されている、周防国清寺旧蔵の宋紹興九年(一一三九)刊単疏本『毛詩正義』には、第二類の「金澤文庫」印が認められる。憲実の学校への寄進は永享十一年(一四三九)、大内氏治下の長門大寧寺に至つたのが宝徳四年(一四五二)であるから、この頃に第二類鈴印の進行していた可能性がある^⑬。そして前述のように、金沢文庫本の宋版には、胡蝶装の時に鈴された痕跡がしばしば見られ、当初はみな胡蝶装であつたと想定することが、一応は可能である。そうすると、金沢文庫本の宋版の改装が始まったのは、早くとも室町時代前期、十五世紀以降と考えなくてはならないことになる。

また永祿三年(一五六〇)、北条氏政、氏康父子から足利学校の庠主九華(玉岡瑞興)に贈られた、足利学校遺蹟図書館蔵(南宋初)〔明州〕刊本『文選』の毎冊尾には、第三類の「金澤文庫」印が鈴されている(図



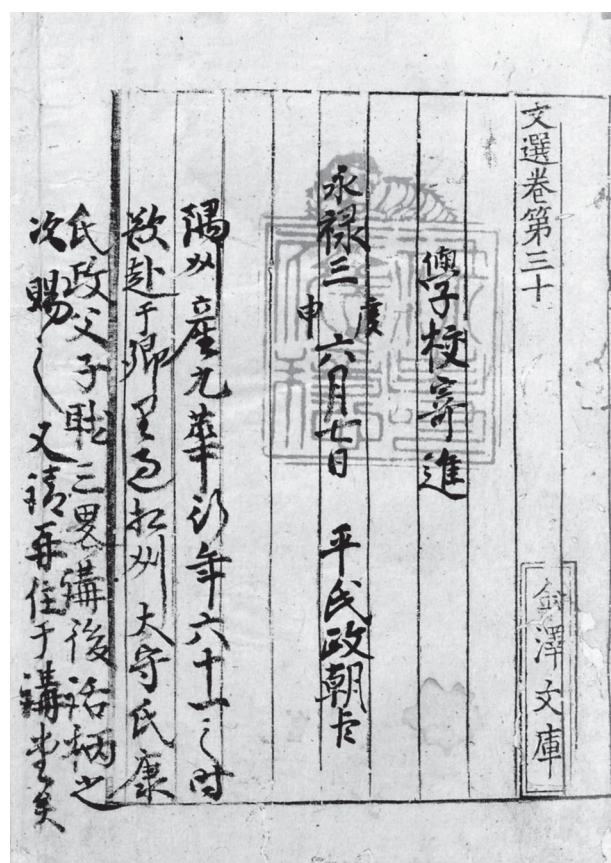
3. 金沢文庫本宋版『太平寰宇記』（宮内庁書陵部蔵）



4. 普門院本宋版『魏氏家藏方』（宮内庁書陵部蔵）

5)。該本は、永祿三年六月、生国の大隅に帰還の途次、相模に立ち寄り『三略』を講じた九華に対し、学校庠主への再任を請うために、北條氏政が寄進したものであり、その際の氏政の伏虎方形大朱印と、九華の墨識を有する。また九華の弟子で天正十五年（一五八二）に庠主を嗣いだ三要（閑室元信）朱墨書入の識語も見える。この版本の原本を見ると、現在は袋綴綾装であるが、「金沢文庫」印と共に、氏政の虎印も、現在は背中合せになった前半張に映っており、この時まで谷折りの、恐らくは胡蝶装であったことを示している。しかし三要による夥しい書入れは、山折り時の対面に悉く映っているから、少なくともそれまでには袋綴に直されたと見られる。これを是とすれば、該本は永祿三年（一五六〇）から、三要が京都の豊臣秀次の下に遷った天正十九年（一五八六）までの間に、九華か三要の、どちらかの手で改装されたのであろう。

この例から考えれば、金沢文庫本の改装は、少なくとも十五世紀半ば頃から十六世紀の間に行われたと結論される。つまり、これらの宋版と、続く元版も含めた中国の版本は、日本の年代で言えば、南北朝室町時代に、次々と改装されていったようである。そしてその契機は、やや先行する五山版の装訂にも看取することができる。



5. 金沢文庫本宋版『文選』（足利市蔵）

三 早期五山版の姿

鎌倉時代末期、宋代仏教の影響を受け、新たに日本に移植された宗派である禅宗の教団は、活潑に教学を発展させていた日本在来の各宗派に仿い、教学書の出版を開始した。しかし、特定の經典に過度に帰依せず、師匠と弟子の間の直接の教導を第一とする尊祖の考えから、祖師の著作や語録を出版したのが、その始まりで、鎌倉寿福寺に居た来朝僧の大休正念が、弘安六年（一二八三）、檀越であった金沢北条氏の二世顕時に勧めて、唐の黄檗希運の『伝心法要』を刊行させたことは、初期の事例としてよく知られている。¹⁶⁾

鎌倉時代の来朝僧は、鎌倉に拠点を置いた北条氏が、新たな政権に相応しい宗教政策として禅宗を優遇し、建長寺や円覚寺を築き、その指導

者として宋から招いた僧侶達であった。彼等は入宋僧や海商の働きかけによって、日宋貿易の中国側の拠点であった、浙江方面の禪刹から来日したが、南宋時代に当たるこの時期の臨安周辺が、出版の拠点でもあったことは、日本の禪宗の出版にも強い影響を与えた。¹⁷⁾

それは、中国の禪院では既に祖師の語録を刊行する習慣が根付いており、世俗の書と変わらない様式の版本が造られていて、来朝僧もその効用をよく心得ていたからである。例えば、建長寺を開創した蘭溪道隆の語録は、中国での開刻が試みられているし、¹⁸⁾ 上述の大休正念や、円覚寺と、京の南禅寺にも居住した兀庵普寧の語録についても、日本での編集ながら、宋版と見紛う様な版本が刊行されている。

そこで日本の禪宗も、教学書の出版という手法を、在来の他宗派にも増して積極的に採用したし、写本の複製という、日本の出版の既成概念を廃して、新たに宋版の様式を採用した。¹⁹⁾ この動きは、京都の東福寺や南禅寺にも共起し、円覚寺の無学祖元の会下に出た夢窓疎石の一派が、室町幕府と結び、宋制に仿う五山官寺の経営に参画する過程で、その拠点となった嵯峨天龍寺、臨川寺に於いても、宋元版に基づく翻刻が陸續と行われた。ここに、内容上も出版様式の上からも、他の刊者と一線を画する所の、五山版が成立した。

早期五山版の特色は、様式の他、出版事業の在り方にも認められる。在来の寺院出版は、寺院内部に於ける教学の興隆という必要から行われた他、専ら經典の權威を支点とし、外護者による莊嚴として、寺院の請負により実施された。しかし五山版では、禪宗の僧徒が主導し、緇素の捐資を集め、僧俗一体となった刊行主体を構成するか、外護者が居士信女として寺院に内在し、その主体的行為と称して出版が行われた。南禅寺に於ける『古林和尚語録』『古林和尚偈頌拾遺』の編刊、建仁寺に於ける『景德伝灯録』『五灯会元』の刊行は、その好例である（建仁寺版につ

いて後述）。

これは、出版を教団の求心力涵養に利用する施策であって、私人としての士大夫を惹き付けていた、中国禪宗の活動に学んでいる。つまり五山版の最大の特徴は、宋代中国に行われた、社会的行為としての出版の模倣という点に認められ、宋版様式の採用は、その具体的な表出の一つのである。

そこで、当初五山版の装訂は、中国風であることが眼にも明かな、宋版の胡蝶装に仿ったものであった。しかし今日、その後の改装により、当初の姿を伝える事例が非常に稀であることは、宋版と同様である。

その間の事情を伝える遺品の一つは、慶應義塾図書館に蔵する鎌倉末刊行の南禅寺版『叢林公論』である（図6）。この書は宋僧惠彬が、儒家や世俗の思想と禪家を比較し、後者の優位を説いた内容で、恐らくは宋版を覆刻したものであるが、中国の版本は伝存しない。この書は南禅寺を興した規庵祖円が舶載書を覆刻し、その版本を自らの住院である帰雲院に置いたものである。嘉元元年（一二三〇）に誤刻改版の行われた記録があることから、それ以前の刊刻と知られる。²⁰⁾

本版唯一の伝本である慶應義塾図書館蔵本は、首張前半の紙背に「叢林公論」の題目、末張後半の紙背に、延文四年（一二三九）の蒙山智明の識語が見られる。この本は現在袋綴綾装であり、題目、識語が背面に内蔵されているが、これらは元来外側に露呈していたはずであり、胡蝶装の形であって、初めて意味を為す形である。そう考えると、袋綴への改装は延文四年以降ということになる。

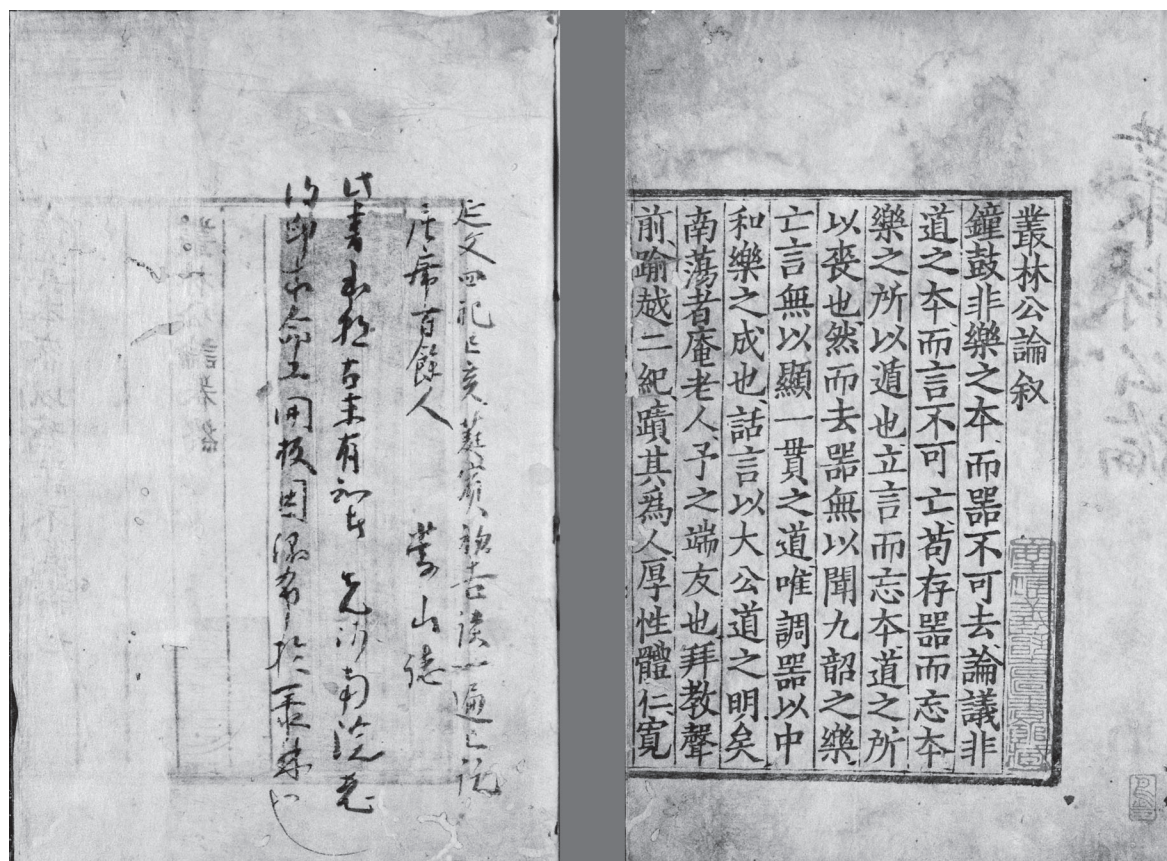
もう一例、東北大学附属図書館に蔵する貞和四年（一二四八）刊本の『景德伝灯録』を挙げる（図7）。本書は北宋時代の蘇州の僧道原が、禪宗師資の問答の要諦を、宗派伝流に沿って編集集成した一大著作で、本版は、元延祐三年（一二三六）湖州万寿寺刊本を元に、京の建仁寺天潤庵を

開いた入元僧可翁宗然の弟子に当たる大用宗任が、前伊勢守若江氏の施財を得て刊行した版本である。

本版の東北大学附属図書館蔵本は、後の学僧による満紙書入本であり、その注記は紙背にも及んでいる。そこで、表紙こそ変更され、後世に糸で補強されているが、包背の糊綴じ本として、胡蝶装の旧形を現在も保っている。なお該本の紙葉の両端には、稀に隣接する張子の辺欄と、首末の文字の点画が微かに映っており、後述のように、版本の版木上の構成は、二張が一面に配された鎌倉期以来の形とみられる。

加えて、同版の慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本は、江戸時代初期、十七世紀初め頃後補の丹表紙を具える袋綴綾装本であるが、版心に著しい虫損があつて、胡蝶装の原姿が推測されるから、或いは東北大蔵本と同様であつたものを、江戸初以前に改装した形かも知れない。該本は、中世には東福寺派の禅院、堺海会寺の什物であつたが、日本伝来の朝鮮版諸伝本にも共通する家形の蔵書印に拠り、近世初頃には三要の旧蔵であつたと判明する。²¹⁾

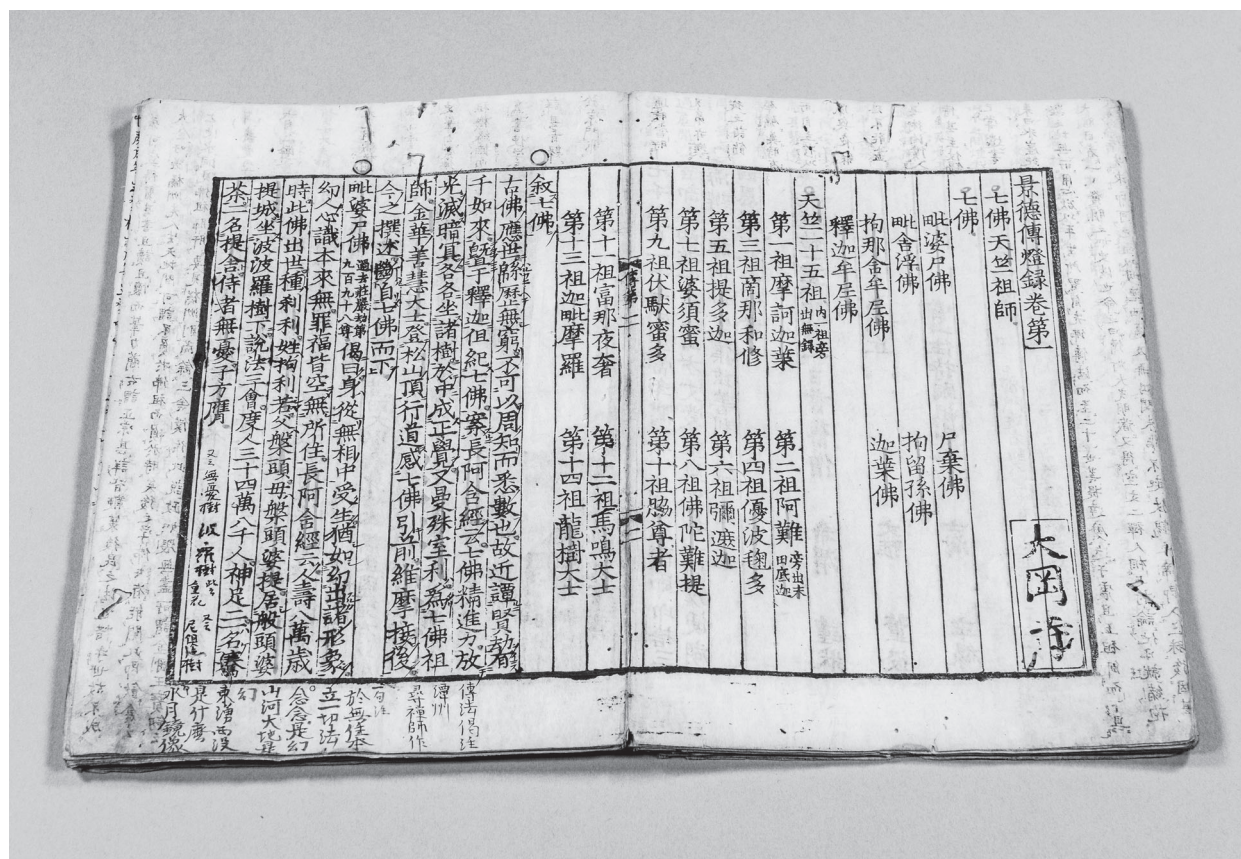
このように、五山版は、当初は装訂の上でも、宋版に仿い造られていた。その理由は、観る者に在来の版本とは全く異なつた印象を与える純中国式の版本を、日本に現前させることにあつたのであろう。そうだとすれば、五山版の装訂も、日本の禅宗帰依者に新たな宗教社会観を扶植する、禅僧達の機略の一環であつたと言えよう。その当否はともかく、五山版の登場により、宋版の特色であつた片面刷り版本の書籍が、日本に普及し始めたと言える。



6. 五山版『叢林公論』（慶應義塾図書館蔵）首尾



7a. 五山版『景德伝灯録』(東北大学附属図書館蔵) 表紙



7b. 五山版『景德伝灯録』(東北大学附属図書館蔵) 卷首

四 五山版と書籍の変容

ところで、五山版研究の大成者である川瀬一馬氏により、五山版の原装と指摘されている版本に、貞治六年（一二三六）京臨川寺刊『禪林類聚』の国立歴史民俗博物館蔵本、覆同七年京建仁寺刊『五灯会元』の大東急記念文庫蔵本、嘉慶元年（一三八七）兪良甫刊『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』の同蔵本等があるけれども、それらの装訂はみな袋綴である。歴史民俗博物館本『禪林類聚』を実際に調査してみると、近世まで東福寺即宗院に伝わったもので、確かに室町時代以前と思われる古い縹色の表紙を備えた袋綴装本であって、明かな改装の痕は見られない。²²

また『五灯会元』は、同じ東福寺の善恵軒旧蔵で、古縹色表紙の包背装ながら、やはり早期の袋綴本である。この本にも改装の証跡がなく、書頭に四箇所の紙釘を打つのみで、糸綴じの痕もない。前後一紙から成る表紙は、書背の前後数枚と書背で本紙に糊付けされている。この伝本には表紙と本文に永正十四年（一五二七）の彭叔守仙の書入があり、現在の装訂とされたのは、それ以前と考えられる。この形は、胡蝶装から袋綴装への、移行の過程を示しているであろう。²³

その他、五山版に限らず、縹色や渋引、古い丹表紙を有ち、室町期の装訂と思われる和本には、始めから袋綴装と見られるものが多い。鎌倉時代以来の粘葉装の書籍では、書背を覆う包背表紙の採用が多かったが、胡蝶装の五山版もそうであったと考ええると、室町期の表紙を有つ五山版も、ほとんど改装されたか、ある時期以降は初めから袋綴とされたかの、いずれかということになる。なお室町末近世初期（十六世紀後半）には包背装の写本が流行したが、その多くは袋綴装である。²⁴

現存する伝本の、装訂の時期を推し量ることは非常に難しいが、五山版については、一つ考慮の材料がある。それは、六張一片の版本を用い

た版本、俗に謂わゆる「三丁掛け」の版本の存在である。六張一片とは、一面に三張ずつ、表裏で六張分を一片に刻んだ版本の様式を指す。

五山版にこの様式の版本が用いられたことについて、版本自体は現存しないものの、幾つか例を挙げて論証したことがあり、これらは、幅七十五から一百糎程度の長版を基礎としたことが推定される。日本では冊子本の印刷についても、版本の彫刻が寺院周辺で行われ、長版の使用が維持されたことを前述したが、五山版にもそれが引継がれ、ここに、日中の書籍文化が渾然一体となった、片面刷り版本用の長版が製造された。

六張一片の版本の存在は、版本の書頭に、隣接する張の首末が刷られている場合があつて、その特徴を基に、版本の上での配置を再構することによって、推知される（図8）。これらは、隣接の張があまりに近く雕られたため、前後の張の辺欄や首末の文字が刷られることを、避けられなかったのが原因であるから、一面二張よりも、一面三張の場合により多く現れ、その結果を「三丁掛け」と呼んだのである。

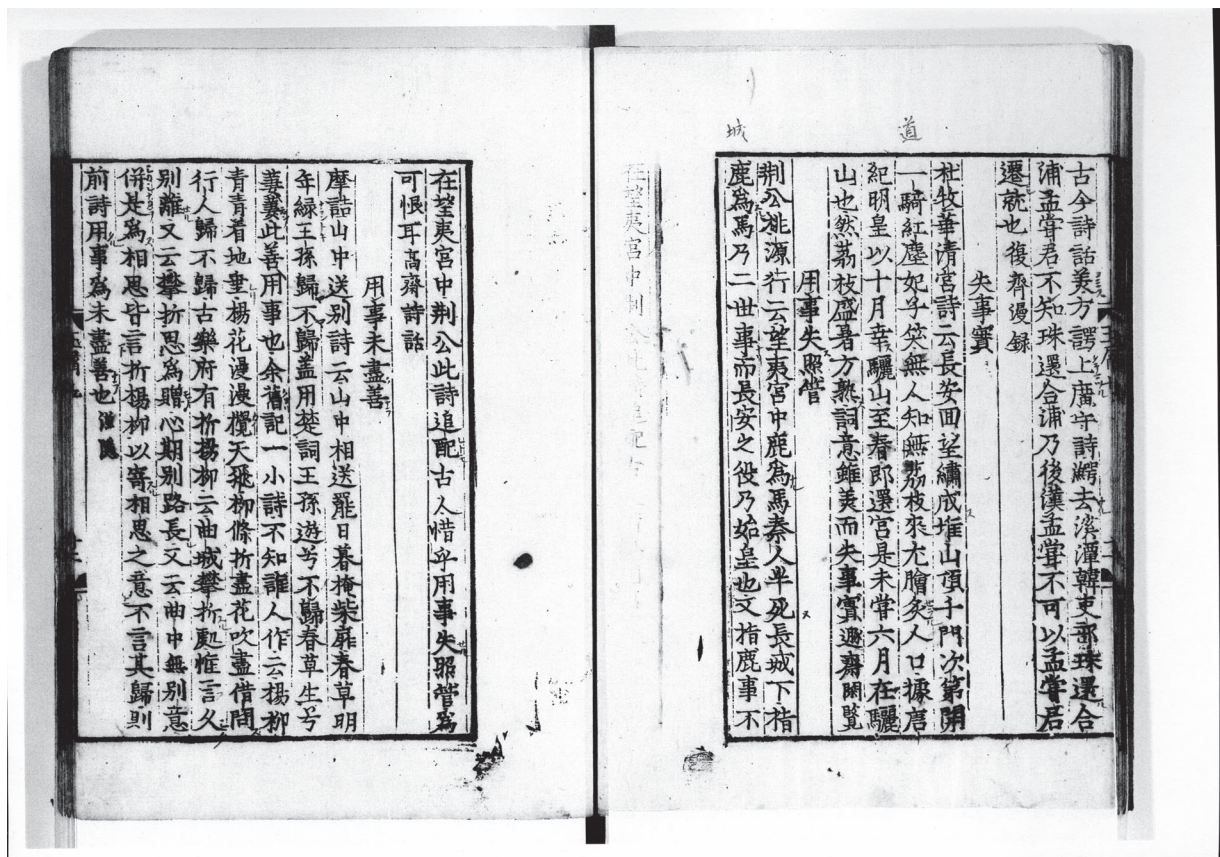
六張一片の版本は、貞治六年（一二三六）に福州から集団で渡来した来朝刻工の刊版に、しばしば見られる。具体的には、いずれも南北朝後半に刊行された『翻訳名義集』（陳孟榮、兪良甫）、『祖庭事苑』、『月江和尚語録』（応安三年（一三三〇）刊、兪良甫、彦明）、『毛詩鄭箋』、『三註』（新板大字附音釈文千字文註）『新板増広附音釈文胡曾詩註』『重新点校附音増註蒙求』、大・仲）、『精選唐宋千家聯珠詩格』、『詩人玉屑』無跋本（陳仲、陳伯寿）、『同』有跋本等である。なお同じ五山版でも『春秋経伝集解』、『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』（嘉慶元年（一三八七）、兪良甫）、『歴代帝王紹運図』等は、一面二張の雕版に拠る。袋綴包背装の例として挙げた覆貞治七年刊本の『五灯会元』は、一面二張を基本とするが、稀に一面三張の箇所があつて、版本の様式の上でも、過渡の様相を示している。

本稿第一章に見たように、五山版以前、鎌倉時代の冊子用の版木を見ると、片面に二張、表裏で四張一片の様式が普通であった。これは両面刷りとする都合もあったであろうが、潜在的には、平安時代以来の長版による卷子本や、折本用の版木の様式に連属するのであろう。この四張一片の版木は、第三章でも触れた、貞和四年（一三三八）建仁寺刊、胡蝶装本の『景德伝灯録』にも微かに現れているし、五山版の盛期を経て近世まで続いている。一方、中国で商業出版に関わった宋朝刻工は、予定される印面の幅が狭い場合、恐らくは幅八十糎程度の版面の内に三張を詰め込み、版材の利用効率を高めていたのである。しかし、長版による冊子本の印刷に通じていなかったため、隣接張の一部が映ってしまう結果を招いたのであろう。

このような結果が許容されたのは、両側に附随する餘計な印象が、書脳に隠れてほとんど見えなくなる、袋綴の装訂が前提とされていたからではないか。

仮にそう考えて見ると、早期の五山版は胡蝶装で行われたが、中後期の五山版は始めから袋綴で装訂されたことになり、伝本の現状をよく説明できる。胡蝶装本からの改装も、同時に行われたのであろう。胡蝶装の五山版も四張一片の版木を用いた可能性があるが、紙葉への附着は極めて微弱であり、ある程度の間隔を以て印面を配置し、注意を払って印刷したことも、同時に看取される。

そこでさらに考えを進めれば、日本では宋朝刻工時代の前後、即ち一三六七年以降、南北朝後半頃に、片面刷り袋綴の書籍が造られ始めた、ということになる。宋朝刻工は元末の争乱を避けて来日したと見られるため、これらは中国の年代で言うと、元末明初期の事象である。



五 中世後期刊本の版本と装訂

五山版以外の版本ではどうか。ここに南北朝から室町期に及ぶ、二つの事例を加えてみよう。その一つは、謂わゆる「正平版論語」の例である。正平十九年（一三六四）、堺の道祐居士が刊行した『論語集解』は、中国でも夙に錢曾が注目したように、日本旧鈔本の伝統を嗣ぐ本文として著名であるが、その版本も、版本一面に二十四行を配する、卷子本用の古式の長版であった。但し現存本では、前後各十二行の中央に当たる界線近くに、巻数、張数が附刻されている。これは、一面から二葉を刷って、それぞれ半折することを前提とするもので、現存本も、そうした袋綴の装訂である²⁶。

なお正平版の版本は現存しないが、その様式は、一張の左に第十三行が、次張の右に第十二行が、現在の書脳部に重ねて映っていることから推知される。また張数等の標記はごく簡単で、後世の附刻であるかも知れず、当初の装訂は特定できない。

この正平版を、室町時代の長享三年（一四八九）以前に覆刻した次の世代の版本では、十二行ごとに版面を分け、前後の紙葉には映らない様、版本上の配置を変更した。このことは、現存の版本の他、残存する版本によって直接知ることができる。該版は、五山式の片面刷り版本用の長版と同様、表裏に二張ずつ雕刻して、四張一片の構成である。従ってこの段階では、片面刷り冊子用の雕版であったことが明かであり、五山版の様式と揆を一にする。ただ正平版系統の『論語集解』では、元来袋綴綫装であったのかどうかは、必ずしも定かではない。

もう一つ、越前版の医書『八十一難経』の例を挙げる。本書は熊宗立『新刊勿聴子俗解八十一難経』の明成化八年（一四七二）刊本を、室町後期の天文五年（一五三六）頃、越前の大名朝倉孝景が、医師谷野一栢の請

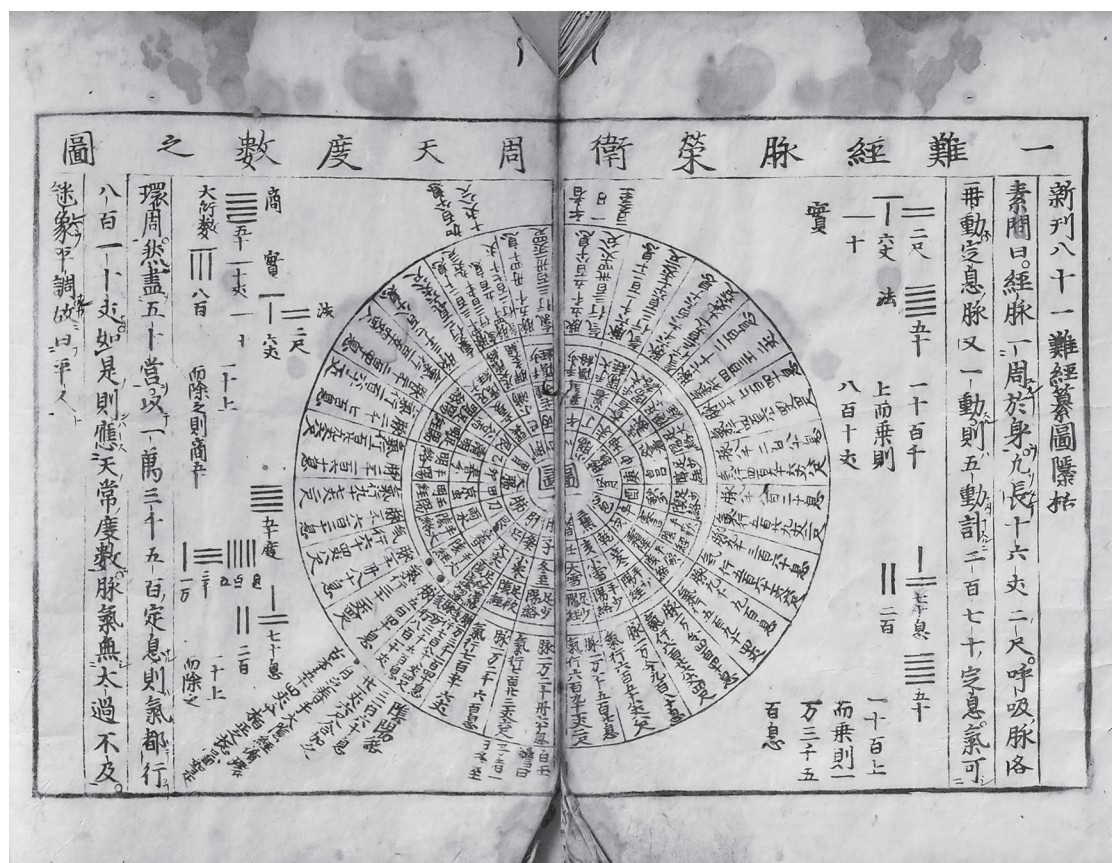
いにより翻刻させたものである（図9）²⁷。

この本には巻首に「図要」及び「纂図櫟栝」の項目があり、劈頭に「一難、経脈榮衛周天度數之図」として、第一張の前半から後半に渉る、大きな円形の図がある。これは一見すると、谷折りの胡蝶装とした方が、図の全体が看取され便宜のようであるが、折り目附近の様子をよく観察すると、円形の図を前後に分け、折り目を避けて印刷できる様に工夫しており、胡蝶装ならわざわざ図形を分断する意味がないことから、山折りの袋綴が前提であったことと知られる。この措置は、現存するこの部分の版本を見ると、一層明確である（図9b）。

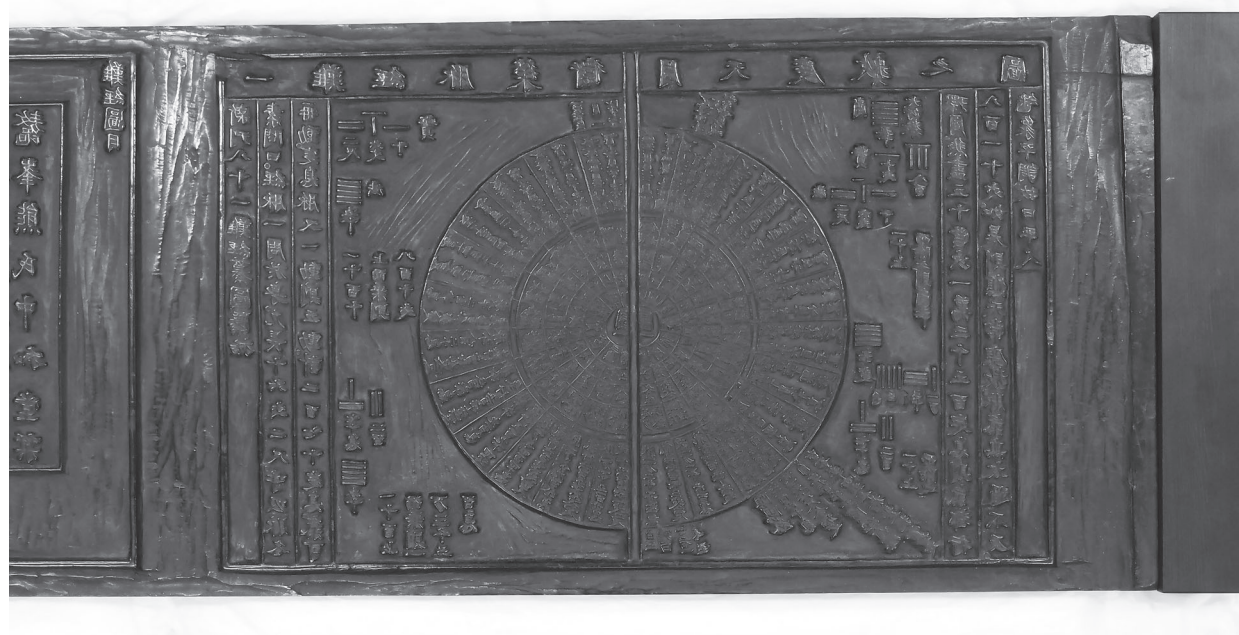
さらに、「十難」図のように、袋綴の装訂で一覧できるよう、二張に分けて一図が配置された箇所もあり、「一難」の場合は、劈頭に於ける已むを得ない措置だったことがわかる。こちらは五山式の片面刷り用の長版である上、袋綴とするための版本であることが明瞭である。

なお袋綴本での図示の例は、享祿元年（一五二八）以前刊行の広義の五山版とも言える、堺版の『韻鏡』でも明かであり、こちらは版本を遺存しないが、各図が前張の後半と、次張の前半に分けて釐刻され、装訂後に一覧できる様、工夫されている（図10）。版本の様式から見ると、十六世紀初の室町時代後期には、袋綴の装訂が定着していたと言えよう。

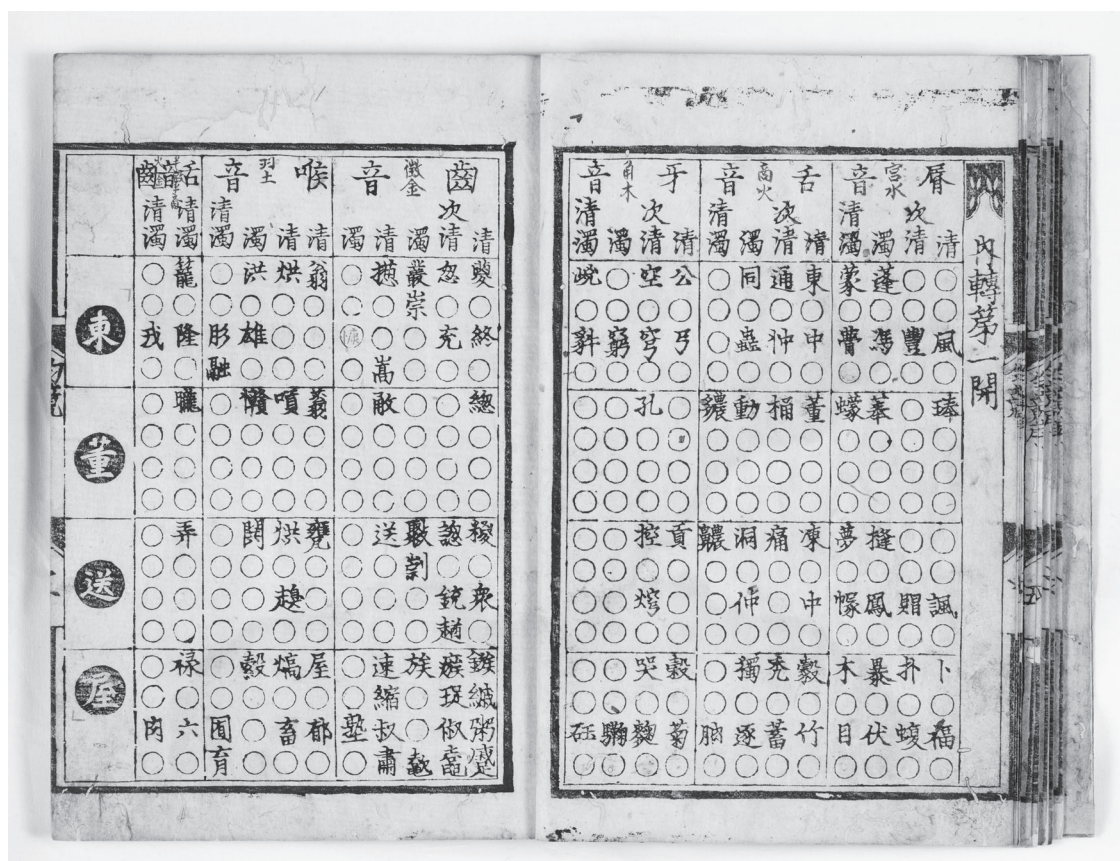
以上の言及を、年代を逐ってまとめて見ると、別表のようになる。全体として、鎌倉時代から室町時代までを含む中世のうちに、版本の受容が進捗する過程で、袋綴冊子本の装訂が定着して行ったことがわかる。そして、その転換期は南北朝後半から室町期、十四世紀半ばから十六世紀に掛けての間であったと指摘できる。特に、一三六七年以降の十四世紀後半、中国人来朝刻工の活動を置いてみると、この頃に大きな変遷の契機があったと考えられ、後期五山版を先駆とし、室町期に全面的に行行したと整理できる。



9a. 越前版『八十一難經』（布施美術館藏）附図



9b. 越前版『八十一難經』版木（西福寺蔵）附図



10. 五山版『韻鏡』（円福寺蔵）

書籍の装訂については、原本の観察に拠って考える他ないが、装訂、改裝の事実は記録されにくく、歴史的な考証の対象とすることが難しい。しかし版本の場合、間接的なながらその様子が反映、定着し、刊刻の情況と併せ考えることにより、その経緯をある程度、推し量ることができる。特に版本の様式を考えると、反映された事実を、より明確に看取できることから、そうした利点を活かし、日本中世の書籍の変遷について、版本を資料とする考察を試みた次第である。その結果、やはり中国との書籍文化交流に、少なからぬ影響を受けていた情況が想定された。この仮設が、東アジア書籍文化史理解の一助となることを願って已まない。

〔注〕

- ① 宮内庁書陵部蔵、安元二年（一一七六）写本『儀礼疏』卷十五至十六等が挙げられる。
- ② 宮内庁三の丸尚蔵館蔵、粘葉本『和漢朗詠集』等の装飾写本を念頭に置く。
- ③ 竺沙雅章氏『宋元仏教文化史研究』（二〇〇二、汲古書院）。
- ④ 宮内庁正倉院事務所蔵、寛治二年（一〇八八）刊本『成唯識論』（春日版）はその例に当たる。
- ⑤ 大屋徳城氏『寧楽刊經史』（一九二三、内外出版、また拙稿「日本中世の版本と版本」（二〇一一至一四年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（B）「中世を終わらせた「生産革命」——量産化技術の広がり」と影響——）報告書、代表中島圭一、二〇一五）。
- ⑥ 以下、注⑤大屋氏著書、白石克氏『慶應義塾図書館蔵 日本古刊本図録』（慶應義塾図書館、一九九五至九六）、水原堯栄氏『高野板之研究』（一九三二、森江書店）、高野板板木調査委員会『歴史資料高野板板木調査報告書』（一九九八、和歌山県高野町）、印刷博物館春期企画展図録『空海からのおくりもの 高野山の書庫の扉をひらく』（印刷博物館、二〇一一）、藤堂祐範氏『浄土教版の研究』（一九三〇、大東出版社、一九七六増訂）。
- ⑦ 森克己氏『日宋貿易の研究』（一九四八、国立書院、『日宋文化交流の

諸問題』(一九五〇、刀江書院) 他『森克己著作選集』(一九七五、国書刊行会) 増補再録、山内晋次氏『奈良平安期の東アジア』(二〇〇三、吉川弘文館)。

⑧ 『御堂関白記』寛弘七年(一〇一〇)十一月二十八日条。

⑨ 小林芳規氏『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』

(一九六七、東京大学出版会)、拙稿「藤原頼長の蔵書と学問」(佐藤道生氏編『名だたる蔵書家、隠れた蔵書家』(二〇一〇、慶應義塾大学出版会)、拙著『中世日本漢字の研究 韻類編』(二〇一二、汲古書院) 序説一。

⑩ 『山槐記』治承三年(一一七九)二月十三日条。

⑪ 関靖氏『金沢文庫の研究』(一九五一、講談社)、『金沢文庫本の研究』(一九八一、青裳堂書店)。

⑫ 今枝愛真氏『普門院蔵書目録』と『元亨釈書』最古の写本 大道一以の筆蹟をめぐって」(田山方南先生華甲記念論文集) 田山方南先生華甲記念会、一九六三。

⑬ 宮内庁書陵部蔵漢籍研究会編『図書寮漢籍叢考』(二〇一八、汲古書院) 図録編、Ⅲ宋版「17. 太平實字記」の項(拙稿)。

⑭ 注⑬図書、Ⅲ宋版「27. 魏氏家蔵方」の項(上原究一氏執筆)。

⑮ 注⑪関氏著書、田辺久子氏『上杉憲実(人物叢書)』(一九九九、吉川弘文館)、川瀬一馬氏『日本における書籍蒐蔵の歴史』(一九九九、ぺりかん社)。

⑯ 以下、川瀬一馬氏『五山版の研究』(一九七〇、日本古書籍商協会)、また注⑨拙著参照。

⑰ 椎名宏雄氏『宋元版禅籍の研究』(一九九三、大東出版社)。

⑱ 佐藤秀孝氏「虚堂智愚と蘭溪道隆」とくに直翁智侃と『蘭谿和尚語録』の校訂をめぐって」(『禅文化研究所紀要』第二十四号、一九九八)。

⑲ 大沼晴暉氏『図書大概』(二〇一二、汲古書院)。

⑳ 『海蔵和尚紀年録』同年条に拠る。阿部隆一氏『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』(慶應義塾図書館、一九五八) 指摘。慶應義塾大学附属研究所蔵文庫編刊『禅僧の書と書物』展図録(二〇一八) 参照。同本の書誌は概ね以下の通り。

四八六

〈慶應義塾図書館 一一〇X・一八二・一〉

叢林公論

宋釋慧彬撰

〔鎌倉末〕刊〔修〕〔覆宋〕刊本

延文四年(二三五九) 蒙山〔智明〕訓点標注并識語書入

後補繹色艶出表紙(二〇・三×一四・一糎) 左肩題簽を貼布し「叢林公論〈全〉」と書す。袋綴じ綾装、胡蝶装を改む。本文楮打紙、虫損修補。首に「叢林公論叙」(中略) 南蕩者庵老人予之端友也(中略) 淳熙己酉季春芋魁巖主/宗惠叙」を附す。首題「叢林公論/者庵」(慧彬) 述、每章改行。

四周双辺(一三・五×一〇・一糎) 有界、每半張九行、行十四字、歐陽詢体。闕筆、匡貞微。版心小幅、白口、单黒魚尾下題「公」、張数。二張掛け。第二十四至二十七張左右双辺、写刻体(補刻)。尾題「叢林公論巻終」、一行を隔て有界四行に掛け墨塊。

首葉背面前方に「叢林公論」と大書す。〔蒙山〕朱標圈、豎批点、同墨句圈点、間々返点、送仮名、豎点、欄外批校音注、出処注記書入。別手墨筆欄外貼紙補注書入を存す。尾題下に单辺方形中单辺円形陽刻「蒙(卦)山」朱印記、末葉後半背面に「(格低) 延文四祀己亥蕤賓初吉讀一遍已訖/居席百餘人 蒙山誌」、行を接し「此書本朝古未有知者 先師南院老/得印本命工開板因縁布於叢林也」墨識あり。首に单辺方形陰陽刻小「島田」朱印記、前見返し貼紙に双辺方形陽刻「幸田成友(書楷)」朱印記を存す。

⑳ 当該本の書誌は、概略下記のとおり。

景德傳燈録三十卷 附西來年表一卷

宋釋道原撰

貞和四年(二三四八) 刊(東山建仁天潤菴玉峯正琳) 覆元延祐

三年(一三二六) 刊本

首に「景德傳燈録序」(四行低) 翰林學士朝散大夫行左司諫知制誥同修國史判史館事柱国/南陽郡開國侯食邑一千一百戶賜紫金魚袋《臣》楊《億》撰(表)、「西來年表(略大字)」重刊景德傳燈録狀/湖州路道場山護聖萬歲禪寺耆舊僧 希渭(中略) 伏觀(中略) 景德至延祐丙辰凡三百一十七

年舊板銷無存後／學慕之罔及爲此發心重刊忽得本路天聖禪寺松廬／和尚所藏廬山穩庵古冊最爲善本良愜素志遂於丙／辰年正月初十日將衣鉢估唱得統金一万二千餘／縑是日命工刊行于世流通祖道此錄總計三十六万／七千九百一十七字至當年臘月一日畢工隨即印捨三／百部於兩浙安衆名山方丈蒙堂衆寮各一部以便湖海辦道禪衲衆集慈善利用報／四恩併資三有者／大元延祐三年臘月一日耆舊僧 希渭 謹上／(格六) 小比丘(格六)《文雅》(格三) 董役／(格六) 當山住持嗣祖比丘(格三)《土洵》(格三) 主緣／(格六) 附す。首題「景德傳燈錄卷第一／七佛天竺祖師／(小目)／叙七佛」句下補注(雙行)校注(同)。三十卷。

左右双辺(二・二×一四・九厘)有界、每半張十三行、行二十三至二十六字。版心(幅約〇・八厘)線黑口、双黑魚尾(向不對)、上尾下「傳第幾」、下尾下張數。下象鼻に原工名「古」「陳」「召」「戸」「壬」あり。尾題「景德傳燈錄卷第幾」(但卷第一作「卷第二」)。尾に「景德傳燈錄後序／左朝奉大未充右文殿修撰權發遣台州軍州事劉 斐讓／(中略)／紹興四年上元日等慈菴善男子睢陽劉 斐仲忱序」(格四) 跋／(中略) 福州大寺知藏僧正自以寇亂而來文籍道厄募緣／再刊此書以便道俗覽扣余爲序曰書其後紹興壬子初／冬十日長樂鄭昂題」(格五) 疏／(格六) 天童宏智和尚撰」を附し、宏智疏末後、一行を隔て「(上略) 此錄權輿南方無人板行東土天下禪林思慕久／矣粵有勢州前太守若江氏琳玉峯施于錢財鉅／于梓木灯之續燄光顯其傳焉舉世僉曰吳僧／道原復生本朝得法普濟大聖令知士師承有在聊／亦宗任侍者化他而發于七百善知識狗頭酌來之／機者歟」(三行) 貞和戊子八月廿五／南禪乾峯士曇謹誌(善行)を存す。

卷第二以下每卷尾に双辺亀甲形無界「延祐丙辰重刊天／道場山禪幽之菴」等牌記あり。卷十尾に墨塊中方形陽刻「貞和戊子重刊于／城州東山天潤菴」、卷二十四尾に同「貞和戊子重刊于／東山建仁天潤菴」(格四) 刊行」卷二十七尾に墨塊中方形陽刻無界「貞和戊子重刊于／東山天潤菴玉峯」(格四) 刊行」、卷三十尾題後、隔一行低三格「貞和四年歲在戊子落陽寄住正琳命工刻梓／捨置于普濟大聖禪師塔所建仁天潤菴廣開／法眼永祝堯年上報／四恩下資三有法界有情同圓種智者」(四行) 玉峯敬書」記を存す。

〈東北大学附属図書館狩野文庫 別置・阿七・八八〉

十五帖

五山版の装訂

和泉福嚴寺識山玄隆補注書入識語 江月宗玩舊藏

後補茶色表紙(二七・七×一八・九厘)、料紙の四周に見える闕損を被らず。左肩に題簽を貼布し「景德傳燈錄」と、直下に別手にて「(幾／幾)」と書す。いずれも又別筆にて、右肩より打付に編目を、首冊のみ前後に「瀟窩」と、毎冊左下題簽下方打付に「全十五冊」と書す。包背胡蝶装。包背部は別料の古丹紙断片、書腦上下二箇所より背に糸線を掛く。見返し本文同料の半截紙(首は闕)。首に楊表、年表、希渭状を存し本文。每帖二卷。末に劉跋、鄭跋、宏智疏及び乾峰士曇跋を存す。

卷一第九張、卷二十一第十六至十八張(近世初)鈔補あり。欄外と稀に紙背に「室町」墨筆補注書入。本文及び欄外、貼紙、紙背に「室町末」墨筆にて返点、連合符、音訓送仮名、校(用「唐本」)補注書入。本文に朱標鈎圈、豎批句点圈、訓点補正書入あり。首帖末に厚手楮紙二葉を補い乾元二年(一三〇三)跋刊「重修人天眼目集」末の靈隱可光頌、物初大觀跋、桂堂瓊林跋を抄録す。縹色不審紙。卷一本文末行下に「室町末」書入同筆にて「和泉州大鳥郡上神庄瑞麟山福嚴寺常住」、同尾題後及び原刊記後に補注書入、行を接し十二格を低して「一絡索与後生晚学如此著之」(七行) 識山比丘玄隆(押花)「第三帖尾に「(板字磨滅仍爲後生晚学別記加點而已」(格四) 識山比丘玄隆(押花)「第十二帖尾に「大日本國和泉州大鳥郡瑞麟山福嚴寺」(格四) 号識山 開山比丘玄隆(押花)「卷三十首右辺外に「爲後生晚学微細之俟來哲之是非識山苾芻玄隆(押花)」識語あり。每帖尾題後に低格し「全部十五冊」墨識下に方牌中円形陽刻「宗／玩」朱印記(江月宗玩所用)を加う。每帖首に單辺方形陽刻「大岡寺」(善行)「墨印記、方形陰刻「雲／岡」朱印記、單辺方形陽刻「瀟／窩」朱印記、首帖前見返しに双辺同「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ／以テ購入セル文學博士ノ狩野亨吉氏舊藏書」朱印記を存す。

〈慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 〇九一・ト三七五・一〇〉 十冊

藏

後補丹表紙(二五・八×一八・六厘) 每冊左下打付に「(幾／幾)」と、首冊右下に同じく「(七／八)」「(九／十)」「(十一／十二)」「(十九／二十)」「(廿三／

四八七

廿四」と書す。押し八双あり。袋綴じ裏打改装、天地截断。卷第十四第十三、十二張錯綴。宏智疏末を闕き、貞和四年乾峰士曇の跋は見えない。

朱校改、別朱標点、標圈、批圈、朱引、返点、句点、墨補注書入。卷一、四、十四、十八、二十二、二十六、二十八尾に「海會寺常住」、卷六、十六尾に「海會寺公用」墨識（卷二十六の他は墨減）を加う。卷三尾に陰陽刻家形双辺「敬復／齋」墨印記、卷一首、卷十四尾、卷二十九首に双辺方形陽刻「金澤文庫^{（書標）}」朱印記（二十九首は墨減）を存す。

また注②⑩図録参照。この本に見える家形印は、例えば、朝鮮乙亥字刊〔通〕修本『増統会通韻府群玉』の建仁寺両足院藏本等、近世初将来の朝鮮本に多く見出される。印影は時として非常に微かである。注⑨拙著第二章第三節参照。

②② 注①⑥川瀬氏著書。『禅林類聚』については、拙稿「国立歴史民俗博物館蔵五山版目録解題」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一八六、二〇一四）に書誌解題を略記した。

②③ 該本の書誌は概略下記の通り。

〈大東急記念文庫 一三・外・三〇四〉

五燈會元二十卷

宋釋大川普濟編

〔南北朝〕刊 覆貞治七年（一二六八）刊本

崇壽寺東福寺善慧軒福田福堂舊藏 永正十四年（一五一七）〔彭叔守〕仙句批補注并識語書入

淡縹色包背表紙（二八・二×一九・三糎）、前後一葉。左肩数冊に題簽を存し〔守仙〕筆にて「五燈會元」「幾」と、右肩より打付に同筆にて編目を書す。或いは題簽剥落痕打付に別筆にて「五燈會元 共廿冊」と書す。左下又別筆にて冊数、書根〔改每字〕五 灯 幾と書す。袋綴、包背装。書腦四箇所に紙釘を打ち、その他に綴じ穴なし。首に〔上略〕／淳祐壬子冬住山〔普濟〕／書于直指堂〔普／濟〕大／川印記摸刻〕序を附す。淳祐壬子は十二年（一二五二）、他本に見える宝祐元年（一二五三）王楠序は闕く。首題「五燈會元卷第一／（小目）／七佛」語下夾注〔附〕、每章改行。

左右双辺（二一・五×一四・八糎）有界、每半張十三行、行二十四字、歐陽詢体。闕筆、玄弘敬鏡貞樹。版心、上細黒口、下白口、単黒魚尾下題「五灯幾 小題」、張数。二張掛け。卷一第四十四張版心下辺に原工名、錢良。尾題同首。卷一尾未刻部に陽刻「太宗皇」文。尾に「偈勸 正仲貞首座募縁刊五燈／會元版^{（格四）}」妙喜庵主圓月／（中略）貞治馬兒年正月望書／^{（以下略）}此録禪徒至寶也禪行／我朝莫盛如今未刊行／焉誠為缺典廣化衆縁／終成美事戊申重陽日／泉南小比丘彦貞謹識／^{（以下略）}版留建仁靈洞／法印宗應刊行^{（書標）}」を存す。貞治馬兒年は五年（一二六六）、戊申は同七年。又〔上略〕謹就／景德靈隱禪寺命諸禪人集成一書／名曰五燈會元以便觀覽爰竭己資／及募同志選工刻梓用廣流通（中略）寶祐元年正月旦日沈〔淨明〕謹題^{（書標）}」あり。

每冊首欄上に「^{（改每字）}崇 壽 寺」墨識（見返しに映ず）あり。卷中〔守仙〕朱標鉤圈、豎句点、直截、批圈点、同墨欄上標注、稀に補注書入。行間別朱補注書入。間々別墨返点、連合符、送仮名書入を存す。卷二以下、守仙細朱にて巻尾題下「永正十四丁丑八月晦夜半挑寒灯於善惠室朱句了仙廿八歳」等、卷十九「永丑十四仲冬念日朱句了 仙誌之廿八齡」に至る加點識語書入（末巻後なし、但し末冊後見返しに朱識「永」以下映ず）あり。第二冊以下前表紙中央、毎冊首に双辺楕円形陽刻「善慧軒^{（書標）}」墨印記を存し墨減（印影見返しに映ず）。毎冊首に単辺方形陽刻「江風山／月莊」朱印記（福田福堂所用）あり。

②④ この時期以前に改装された宋元版にも、包背装のものがしばしばある。斯道文庫に蔵する清原宣賢手沢の〔宋末元初〕刊本『附音釈文句解論語』も、宣賢所用と伝える「東」墨印記を、後補古洪引包背表紙上に見出す。

②⑤ 拙稿「詩人玉屑」版本考」（『斯道文庫論集』第四十七輯、二〇一三）、「六張一版の説」（『国立歴史民俗博物館特別展図録「時代を作った職人」、二〇一三）、注②解題、「五山版「三註」考」（『これからの国文学研究のために——池田利夫追悼論集』、二〇一四、中文訳『日本古鈔本與五山版漢籍研究論叢』二〇一五、北京大学出版社）。

②⑥ 川瀬一馬氏「正平本論語攷」（『日本書誌学之研究』一九四三、大日本雄弁会講談社）、高橋智氏「室町時代古鈔本『論語集解』の研究」（二〇〇八、汲古書院）、また注⑤拙稿参照。

②7 注⑤拙稿参照。

②8 諸本の解題を拙稿「五山版『韻鏡』再考」(『学林』第六十二号、二〇一六)に記した。

〔別表〕

【鎌倉時代】

仁治二年(一二四一)

円爾帰国

建長四年(一二五二)

北条実時、幕政に参画

同 五年(一二五三)

高野版『三教指帰』(粘葉装本) 刊行

同 七年(一二五五)

東福寺造営、この後、普門院藏書成立(胡蝶装宋版)

正嘉二年(一二五八)

称名寺造営、この頃、金沢文庫成立(胡蝶装宋版)

弘安六年(一二八三)

五山版『伝心法要』 刊行

正応元年(一二八九)

浄土教版『選沢本願念仏集』(粘葉装本) 刊行

嘉元元年(一二〇三) 以前

五山版『叢林公論』(胡蝶装本) 刊行

元弘三年(一二三三)

金沢北条氏滅亡

【南北朝時代】

貞和四年(一二四八)

五山版『景德伝灯録』(胡蝶装本) 刊行

延文四年(一二五九)

五山版『叢林公論』(胡蝶装本) 識語

正平十九年(一二六四)

堺版『論語集解』 刊行(卷子本様式改変)

貞治六年(一二六七)

刻工集団渡来

同 年

同 七年(一二六八) 以後

応安三年(一二七〇) 以前

同 年

この頃

嘉慶元年(一二三七)

嘉慶元年(一二三七)

【室町時代】

宝徳四年(一四五二) 頃

長享三年(一四八九) 以前

永正十四年(一五一八) 以前

享禄元年(一五二八) 以前

天文五年(一五三六) 頃

永禄三年(一五六〇) 以降

この頃

五山版『禅林類聚』(袋綴綫装本) 刊行

五山版『五灯会元』(袋綴包背装本) 刊行

『普門院経論章疏語録儒書等目録』を編集

この頃、普門院「印鈴記(胡蝶装本、袋綴改装)

五山版『月和尚語録』(三張掛け) 刊行

五山版『翻訳名義集』『祖庭事苑』『毛詩鄭箋』

『三註』『精選唐宋千家聯珠詩格』『詩人玉屑』

(三張掛け) 刊行

五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』(袋綴綫装本)

「金澤文庫」印鈴記(胡蝶装宋版)

覆正平版『論語集解』(片面刷り版本様式) 刊行

五山版『五灯会元』(袋綴包背装本) 印刷装訂

五山版『韻鏡』(袋綴様式) 刊行

越前版『新刊勿聴子俗解八十一難経』(袋綴様式) 刊行

足利本『文選』(胡蝶装宋版) 袋綴改装

袋綴包背綫装の写本流行

(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授)